



「大阪の元気!ものづくり企業」冊子掲載企業(匠企業)
大阪府では、「大阪ものづくり優良企業賞」受賞企業等、大阪府内の総合力が
高く優れたものづくり中小企業を「匠企業」として位置付けている。



大阪府経営革新計画承認企業
大阪府では、中小企業者の経営革新を支援するため、中小企業
等経営強化法に基づく経営革新計画の審査・承認を行っている。

4 卓越した技術とアイデアで 持つだけ心躍る、そんな傘を。

大阪本社と中国・廈門工場の2つの拠点をもち、企画・デザインから
生産まで自社で一貫製造するカムアクロス。1995年創業の同社は
OEMを中心に展開し、「日本品質中国生産」を強みに業績を伸ばし
ている。そのいっぽうで傘の可能性を広げる活動にも携わる。たとえば
地震などで被災した子どもたちの笑顔を撮影し、印刷した傘を広げて
希望や平和の願いを発信するアートプロジェクトでは、その象徴である
「MERRY UMBRELLA」作製に長年携わる。

「道具としてだけでなく、傘の価値を高めていきたい」と、今中光昭代表
取締役は模索し続けている。同社は技術に支えられている自負がある。
傘の製造は現在でもほとんどの工程が手作業。手づくりの木型を
使って生地を裁断し、ミシンで生地を張り合わせ、糸で生地と親骨を
取りつける。大阪府認定「なにわの名工」渡邊政計氏を中心につくら
れた傘は、その仕上がりの美しさに見とれてしまうほどだ。渡邊氏は、
80代半ばにさしかかる今でも、日々技術を向上させ洋傘初の伝統
工芸士をめざしている。また常在するもうひとりの「なにわの名工」は、
傘の修理専門の職人。「修理して長く使ってもらう。それこそ究極のサ
スティナブルでしょう」。「ODMに限りなく近いOEM生産をしてきたが、
表に出せる商品がない。だから会社のカラーが見えない。今後は世に
出ていくためにメーカーへの道すじをつけたい」と、ダイレクトファクトリー
として「黒子からの脱却」をめざす。そのため創業25周年を迎えた2020
年から、新しい試みが急増中だ。産学連携プロジェクトとして、上田安子



日本の傘メーカーとして唯一、中国廈門に自社工場を構える。渡邊氏から20
年にわたる技術指導を受けた職人たちが日本品質の傘を安定的につくれる
体制を整えている

服飾専門学校でデザインの場を提供。同時に「傘デザイン・コンペ
ティション」も開催。これは自由な発想でデザインされたものを、いかに
具現化するかという挑戦にもつながった。今年のテーマに「オープン
コミュニケーション」を掲げ、社内も改装中。「今後は社員それぞれが、
得意分野を探して実現していく会社になりたい」。伝統の技を守りながら、
変化し続けることを楽しむ、カムアクロスの第二章はすでにはじまっ
ている。 [続く▶](#)

株式会社カムアクロス

<https://www.come-across.co.jp/>
東大阪市吉田本町1-11-10 TEL 072-967-2725



「傘デザイン・コンペティション」グランプリ
作品の、「空飛ぶ傘」と「クジラさん傘」。
自由な発想やアイデアを同社の技術、
ノウハウを使ってカタチにした



「MERRY UMBRELLA PROJECT」では水谷孝次氏から、「傘は夢と
希望に溢れてる。こんなことができるのは傘以外にない」と言われ感激。
以来参加し続け、今年で10年目を迎える

5 伝統的工芸品から アパレルまで桐の可能性を 追求して事業拡大。

一生ものの桐箆笥。岸和田はこの伝統的工芸品の産地として知られ、
大正元年から100年以上この地で桐箆笥をつくり続けてきた留河。
しかし近年、桐箆笥の需要が右肩下がりで減り続けるなか、留河昇
代表取締役は桐を使った製品や桐箆笥のリフォームなどに手を
広げてきた。また伝統的技術を生かし、新たに「桐製一合米びつ」を
開発、2019年に大阪製ブランドの認定を受けた。この商品は地元
自治体のふるさと納税の返礼品にもなり、人気を集め同社の売上
の約半分を占めるほどに成長した。

しかしアイデアマンの留河氏は現状に満足せず、桐の特性を生かした
新規事業を次々と立ち上げている。まず桐箆笥の防虫・調湿機能
から、「中に入れてあるものを守る」ことを拡大して考案されたのが
壁紙。和紙を抄紙する(紙にすること)際に桐の木をパウダーにし
て練りこみ、桐和紙にした防虫調湿シートを開発。そのシートに難燃
加工を施した「桐の壁紙」で、国土交通大臣の準不燃材料の認定も
取得。こうして建材業界へ進出したところ、長年交流のあるアパ
レル会社の会長から「糸にすればもっと可能性が広がる」と助言
された。そこで桐和紙を切ってスリット状にしたものを、こよりにして
「桐糸」に。桐の特性である調湿、防虫、抗菌、消臭、速乾の機能を

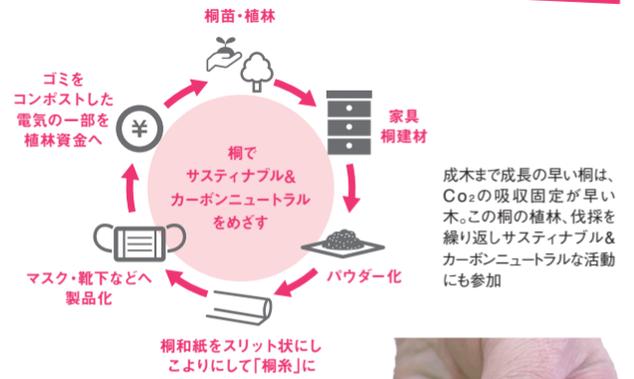


レバーを引くとシャーという心地
よい音がして、下の引き出しに
一合の米が落ちる桐製一合
計量米びつ。さっちり一合ずつ
計れて、米をつぶさない構造に
なっている

そのまま持つ糸で、メガネがくもりにくい「桐糸マスク」を開発した。
こうした展開をおこなう中で、桐の植林活動をおこなう会社から
桐の加工依頼があった。成木までの成長の早い桐は、CO₂の吸収
固定が早い木でもある。ここでは植林して5年で伐採、同社で加工
して建材や造作家具に使用。加工時に出たパウダーから壁紙や
糸をつくり、この収益からまた植林をおこなうという。これはサス
ティナブルな取組みであり、CO₂の排出量をさまざまな手段で相
殺し、排出量を実質ゼロとするカーボンニュートラルにもつなが
る。「桐の加工だけで考えていたら箱のなものをから脱却できな
かったが、粉にして紙にし、さらに繊維にすることで、できることが
一気に開けた感じです」 [続く▶](#)

株式会社留河

<https://www.tomekawa.com/>
岸和田市大町1-8-27 TEL 072-445-0775



成木まで成長の早い桐は、
CO₂の吸収固定が早い
木。この桐の植林、伐採を
繰り返しサスティナブル&
カーボンニュートラルな活動
にも参加

桐製品をつくる段階で出くず。
これをパウダー状にして紙・糸、
さらには繊維製品へと展開



桐の調湿効果で湿気を吸収する布を
使用して、メガネがくもるわずらわさか
ら解放される「桐糸マスク」を開発



6 冷間圧延機の 老舗メーカーの挑戦、 レーザー彫刻による BtoCで世界を広げる。

冷間圧延機的设计・製作で、自動車のエンジン部品であるピストン
リング製造の圧延機や、産業機械などで使用されるリニアガイドの
線材圧延機、超伝導線材の圧延機などを販売するヤスオカ。圧延
ライン上に設置する精密走間測定器では、貴重な国内メーカーだ。
同社では30年ほど前からレーザー加工設備を導入。特にレーザー
彫刻技術に関しては、チタンや超合金などの難削材への加工
品質が評価されており、地域新生コンソーシアムでは、大学や医療
機器メーカーや素材メーカーとともに人工股関節の開発に取り組んだ。
「人工股関節を挿入後、リハビリ期間を短縮するために骨組織の侵入
経路となる溝をレーザー彫刻でつくりました。苦労しましたが、チタン合金
へのレーザー加工時の熱影響層を10μm以下にする目標が達成できま
した」。そう振り返るのは、同社の4代目となる岡岡直樹代表取締役社長。
さらに錫へのレーザー発色の開発へ挑戦も。「ナノ秒レーザーを用いた
錫への発色技術の開発」で、ものづくりイノベーション支援プロジェクト
に認定された。すでに確立されつつあるステンレスへの電解発色や
チタンへの陽極酸化発色技術に対し、融点の低い錫は発色が困難



すでに確立されつつあるステン
レスやチタンへの発色技術に
対し、困難とされていた融点の
低い錫へのレーザー発色に
成功

とされていたが、錫へのレーザー発色を実現し、レーザー発色のメカ
ニズム向上をめざしている。

またいっぽうでレーザー彫刻技術による新たな事業が注目されている。
行政の依頼で製作したチタン製ミニチュアマンホールが好評を得て
いる。「着色ではなくレーザー微細加工技術を施して発色させている
ため、構造色によりキラキラした発色が得られます」
社長就任から6年、だんだん自分のカラーが出てきたかなと語る。
「社員には自分の手がけたものが、世に出て人の役に立っている
ことを感じて欲しい」。チタン製ミニチュアマンホールのようなB to C
事業は、それを肌で感じてもらえる。社員が自分の役割をしっかりと
認知して、モチベーションアップにつながれば」。たしかな基盤を持ち、
大事な部分は守りながらも自由な発想で展開することで、老舗
メーカーは新たな地平をめざす。 [続く▶](#)

株式会社ヤスオカ

<https://www.yasuoka.co.jp/>
柏原市国分東条町4331-1 TEL 072-976-0324



現在20種類ほど展開するチタン製ミニチュアマンホール。着色ではなく、
チタンの酸化被膜の厚さをコントロールして素材の色を出す。そのため
見る角度によって色合いも変わる



SNSを通じて柏原市の広報担当と
つながり、今年3月から地域のイベント
「かしわらマルシェ」に参加するなど、
活動の幅を広げている